

スキー産業を支えるシニア

吉原 秀東

ミラノ・コルティナ 2026 冬季オリンピックが 2 月 22 日に終了した。

スノーボードやフィギュアスケートでは日本人のメダリストが多数誕生し話題となっていた。私はオリンピック期間に 2 度ほど奥志賀へスキーに出かけた。投宿先ではオリンピック関係の話題で持ちきりになっていた。スキー客ばかりの宿舎では流石にスノボやスケートではなくアルペンスキーが話題の中心であった。

山間部の斜面にできた雪の原。映像では急斜面を時速 100km で滑走してくる。雪面に体が触れんばかりの姿勢で滑り抜けるその姿は人間業とは思えない。鍛え抜かれた人だけが出来るものだと思う。

日本海側を中心に良質の雪がもたらすスキー場が多数ある。バブル期の 1980 年代は、猫も杓子もスキー場を目指していた。「私をスキーに連れてって」という有名な句があった。東京のサラリーマンは金曜の仕事が終わると夜行でスキー場に向かい、月曜の早朝に東京に戻り、職場に直行した。当時のゲレンデは人で溢れ、リフトは長蛇の列。ウォークマンを聴きながらカッコよく滑るのが一世を風靡していた。

翻って、最近のスキー場は外国人か、シニアがゲレンデを席卷している。若者は、少数派ではないか。スキー人口減少の理由は多々あるが、

- ①レジャーの多様化（スマホ、海外旅行等）
- ②若者層のスキー離れ（コスト高、技術習得のハードル）
- ③少子高齢化
- ④バブル崩壊後の経済低迷
- ⑤地球温暖化による雪不足

これらが複合的に作用しスキーが衰退傾向にあると言われている。

斯様な右肩下がりの中でもシニアは最後の一線を支えて踏ん張っている。

- ・ 82 歳の女性は「シーズン中最低でも 40 日滑るのが目標」と公言。
- ・ 昨年会った 88 歳の男性は今年も健在。
- ・ 80 歳になる夫妻は遠方から車で来場しスキー三昧。

スキースクールの教師がいみじくも言っていた。

「今のシニアが後 10 年は続けて貰えるように教えたいたい」

「さもないと自分たちの仕事が無くなる」と。